第５回「都立文化施設のあり方検討会」議事概要

１．日　時：平成１９年１月２６日（金）午前１０時から正午まで
２．場　所：東京都庁第一本庁舎３３階北側　特別会議室Ｎ６
３．出席者：福原委員
草加委員
小林委員
高野委員
原委員
福地委員
太田委員（吉住委員代理）
今村委員
杉谷委員
大笹氏（ゲスト）
高萩氏（ゲスト）
小田島東京芸術劇場館長

４．次　第
意見交換「テーマ：東京芸術劇場の役割・機能について」
５．主な発言
○ 貸し館事業中心の現状では、カラーを出しにくい。情緒的な表現をすれば、活動が白黒なので、戦略として施設自体が積極的に考えて、もっと特色や色を出すべきだろう。
○ 施設が持っている高度な機能を十分に活かせていない事にジレンマを感じる。
○ 東京がアジアの文化の中心地となるべく、東京が持つ地域性・独自性・ブランド力を生かすべきである。
○ 文化を文化政策という一つの枠だけで捉えるより、福祉・教育・産業・観光といった政策を横軸でつなぐ存在と考えるべきである。
○ 外部資金を調達するためには、ハード・ソフト・ミッションが社会から評価されなければ、得られないものである。外部資金の調達を単に経済的な充足よりも、施設の活動に対する評価として考えて欲しい。
○ 文化団体、文化施設間・自治体間・海外都市間でのネットワーク構築が重要である。
○ すべての機能を一気に始めるのではなく、地に足を着けた活動で徐々に展開して欲しい。
○ 施設の改修とは初期機能に戻すことではない、将来に対して機能を獲得することである。機能と利用者の意見を踏まえた上で、要・不要を考えるべきである。
○ 改修で休館するのであれば、同時に音響設備や照明設備などトータルに改修するべきである。
○ 豊島区周辺には、国・都・区・民間と様々なレベルの劇場が集積している。これら文化施設間のネットワークを考え、その中で芸術劇場をどう位置付けるかが改修の方向にも関わる。
○ 「東京芸術劇場でしか観られない」という事の価値を考え、またアジアまで目を広げた経済波及効果を考えれば、機能の縮小ではなく機能のフル活用という選択肢も考えられる。
○ オンリーワンかつベストワンになるというコンセプトでソフトを持てば、東京都がアジアの舞台芸術の拠点・発信基地になり、経済波及効果も大きくなる。
○ 今は時代の転換点であり、芸術の重要性が増している。しかし、その価値が一般には認められていない。公共には、芸術が持つ本来の力を広く一般に理解してもらう役割がある。
○ 貸し劇場だけでは芸術の価値を高めることは難しい。
○ 東京都の文化政策を考える上では、東アジアにおける東京、あるいは世界５大都市（パリ、ロンドン、ニューヨーク、ベルリン、東京）のなかの東京、という視点を持たなければならない。
○ 世界５大都市は、人類が今後５０年あるいは１００年先に抱える問題が先に生まれるようなところなので、その中で人間の価値を考えられる芸術的なことをやる価値はあり、都市を担う自治体の役割でもある。
○ 芸術劇場は東京・日本・東アジア・世界の大都市圏を先取りした芸術施設としての顔を整備す

る必要がある。
○ 「豊島区立舞台芸術交流センターあうるすぽっと」は文化政策を中心とする区行政にしたいという思いから造られている。活動には年間２億円を要するが、行政が後押ししなければならないと考えている。
○ 東京芸術劇場には区と東京の文化を育てるという認識を持って、区との連携を進めて欲しい。
○ 東京都で芸術の価値を知ってもらうような政策が行われてきたのか疑問である。
○ 劇場とは、多様な人間の価値観を、生身の人間の身体で表現する芸術である。現代において身体性の感覚が失われているため、舞台芸術に価値が見出される。
○ 生身の芸術に触れる場として東京芸術劇場を活かすべきだが、それに使われている財政規模があまりにも小さい。
○ 芸術監督やプロデューサーの採用や館長の色を出すためには、専門性の高いスタッフを充実させる必要がある。
○ 高度な劇場機能を有しながら、機能が使われていないことがに税金のムダ使いだと思う。
○ 本来、劇場とは作り手を刺激する空間である。施設の目標を決めなければ、迫りの問題は解決しない。
○ 利用者がたくさんいるので、利用者の理解を得ながら自主事業の拡大をする必要がある。
○ オリンピック招致も含めて、東京の魅力を高めていくことは重要である。
○ 都が自主事業などのために財政的措置を行う際には、劇場が自主的に創作するのか、別の民間の方に任せるのかお金の使い方を考える必要がある。
○ 今までは文化とはプラスアルファの位置にあった。しかし、最近は、政治や経済、福祉などを支える基盤となりつつあるのではないだろうか。
○ 芸術文化が、全ての人間の活動を支える根っこの部分を担っているという事を認知される仕掛けや議論が必要である。
○ 東京都の文化に対するコンセプトの弱さや貧弱な文化政策が色々な課題の原因であると感じていた。
○ 文化は政治や経済と並べて考えるものでは無く、政治や経済の方向をサジェストするものである。
○ 東京都の持っているすべての施設に対して、明確なミッションを示さなければ文化政策があるとは言えない。また、ミッションの達成は、各施設の能力にかかわってくる。
○ お金だけあっても文化は育たない。いい例がバブル期に作られた公立美術館で、ハコだけ立派で美術館としては機能していないものが沢山ある。文化を育てることは大変難しい。
○ まずは文化活動ができる基盤を育てながら、平行して資金を増やせばよい。改修にかける費用は小さくして、ソフトや人材等の育成に重点を置くべきである。
○ 家にいても高品質な画面で演劇が観られる今、劇場に足を運ぶ理由は、それ以上の品質を期待しているからである。劇場に足を運ばないと観られないというものがあっても良いだろう。
○ コンサートの前後には食事などの行動がともなう。その面でも、東京芸術劇場の個性があっても良い。
○ 高度情報化社会の中にあって、情報発信にも工夫が必要である。
○ 劇場は舞台と客席が良いのは当たり前で、付加的な面ではクロークやトイレも重要である。
○ いかに素晴らしい施設であっても、地域から支持されなければいけない。地域に愛され、地域のシンボルであるような東京芸術劇場になって欲しい
○ 地域内の他の文化施設と連携し、エリア全体を盛り上げる視点で活動して欲しい。
○ 区民にとって身近な劇場であり、それで世界に発信できる劇場になって欲しい。
○ 過去に公演場所が池袋だからという理由で出演を断った俳優が、今では出演してくれるほど池袋のイメージは変わった。次は東京芸術劇場自体が変わっていかなければならない。
○ 銀座は商業演劇、下北沢はオフブロードウェイの中心である。池袋も沢山の劇場があり、あうるすぽっとのできるこの機会に連携を考えた方が良い。
○ 自主制作を行うにあたって、東京芸術劇場の職員は４０人にも満たず、人員不足が否めない。
○ 東京芸術劇場がつくられたときの環境・使命が、現在とは異なっているが、反面、予算は減らされ、手も足も出ない状況である

○ 改修について議論する前に、東京都における長期的・中期的な文化政策がきちんと作られ、施設の方向性が示される必要がある。
○ まず２～３年は、高いレベルを目指して、人材と観客の育成、ミッションを明確にする段階と位置付ければよい。
○ 中期的な目標を実現するのに必要な改修であれば、小規模に手当てすればよい。
○ 大改修は新しいソフト・体制等が整った後に、審議会や委員会等で練り上げればよい。
○ 拙速に膨大な費用と数年の期間をかけて大改修・改築するのではなく、数年は次を想定し、ミッションを書き込み、やらねばならないことをやっておくという提言にまとめる。